

ちぬ

CHINU

Vol.
67

対談

開学 60 周年 共に描く大阪体育大学の未来

浪商学園 理事長 野田 賢治 × 大阪体育大学 学長 神崎 浩

私にとっての SFGs
令和 6 年度 事業報告



本物を学び、極める

大阪体育大学

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

ラーニングcommons×デジタルスポーツ・スクエア

CONVERSATION

開学60周年 共に描く大阪体育大学の未来

不断の努力により 智・徳・体を修め社会に奉仕する

対談

浪商学園 理事長 大阪体育大学 学長
野田 賢治 × 神崎 浩

司会進行：浪商学園 経営企画部 部長 野田達彦

大阪体育大学は開学 60 周年を迎えました。東京オリンピックが開催された翌年の 1965（昭和 40）年、西日本で初めて設立された体育大学でした。厳しい時代のなかで大学の新たな未来をどのように切り拓いていくのか。これまで長く学園の経営を担ってこられた野田賢治理事長と、同じく長年学園に貢献され、この 4 月に学長になられた神崎浩学長に対談していただきました。

学生のために立ち返る原点、今こそ、もう一度「建学の精神」を見つめ直す

—— 開学 60 周年を迎え、今の率直な思いからお聞かせください。

野田：この 60 年、よく頑張ってきたなというのが正直な気持ちです。25 歳で入職して以来、47 年にわたって勤めてきました。36 歳の時には、大学が茨木キャンパスから熊取へ移転するという大きな節目も経験しました。当時も今も変わりませんが、やはり大学が学園経営を支える柱となっています。その頃すでに将来的な少子化という課題は認識していましたが、その減り方は予想以上でした。少子化が進むなかで、「教員養成を中心に据えて本当にいいのか」といった声が出ては消えていきました。受験者数は目に見えて減っており、少子化の影響を実感として捉えるには至りませんでした。そのため、「もっと幅広い教育を展開すべきではないか」という声が常にありました。移転後も、「このままでいいのか」と、繰り返し自問自答していました。60 年前、本学は、体育を中心に青少年の健全な育成を願い開学しました。建学の精神は、今なお通じる普遍的な価値観です。先代も先々代も、迷ったらこ

の建学の精神に立ち返ってきました。60 周年という節目を迎え、さまざまな課題を抱えながらも「学生のために何ができるのか」。今こそ、もう一度この建学の精神に立ち返り、大学教育のあり方を考えていただきたいと思います。

神崎：私は、本学に勤めて 40 年になります。今年度、第 10 代学長として就任いたしました。体育・スポーツ系の大学経営をどのように進めていくのか。少子化という時代の流れのなかでも、体育・スポーツ系の大学を志望する受験者、進学希望者の総数はあまり減っていません。その状況を見て多くの大学が体育・スポーツ・健康系の学部学科を新設し、競争が一層激しさを増すなかで、本学の伝統をどのように維持しながら入学生を確保していくのかは大きな課題であり、私自身も改めて建学の精神を見つめ直すことの重要性を深く感じています。本学に入学してくる学生たちは、非認知能力の面で非常に高い資質を備えている特徴があります。これは、スポーツ経験がもたらす成果として、この特性をさらに高めた

うえで、学生たちの進路をしっかりと確保し、本学の魅力を丁寧に発信していくことが、今後の重要な課題であると考えています。

—— 50 周年の節目から 10 年経ちました。この間の本学の歩みについて伺いたします。

神崎：10 年前、本学は健康福祉学部の募集を停止し、小学校や特別支援学校の教員養成を推進するため、新たに教育学部を設けました。その成果はいま十分に表れています。幼児教育コースも設けたことで、幼児から小学校・中学校・高等学校に至るまでの教員、指導者を養成する、幅広い教育体制が整いました。2018 年には、スポーツ局を立ち上げました。これも時代の流れに即して創設されたものであり、現在、優れた機能を果たしています。なかでも大きな改革のひとつが、2024 年度から体育学部をスポーツ科学部へ改組したことです。この改組については以前から議論が重ねられてきましたが、伝統を守る意見も根強く、なかなか実現



に至りませんでした。「スポーツ」という言葉は今では、「体育」を含めて、より幅広い概念を持っています。

また、社会貢献センターや国際交流センターも設置し、地域や国際社会への貢献を進めています。社会貢献センターでは、本学の学生や教職員が学外で取り組む多様な活動を展開し、本学のブランド力を高めるうえで非常に重要な役割を担っています。今後は、これらのセンターをいかに充実させていくか、そしてその活動の中で学生たちをいかに成長させていくかが、ますます重要になってくると思っています。

野田：福祉の領域に職種を広げていったのは、今日の超高齢化社会を見据えてのことでした。1987 年の「社会福祉士及び介護福祉士法」によって、介護福祉士という国家資格が制度化されたことを受けての対応として、当時は、2 年間の教育を受ければ、卒業と同時に

国家資格が取得でき、施設に就職すれば四年制大学卒業者と同等の初任給が得られるとされていました。大阪府の認可を得ることで設置が可能だったため、教員体制を整え、大阪府で 4 校目の介護福祉士養成の専門学校として開講しました。やがて、全国で養成機関が次々と設立され、就職が難しくなっていました。加えて、補助金の不正使用が相次いで報道され、福祉を志す若い世代が減少してしまい、

この分野は非常に重要であつたにもかかわらず、残念ながら閉校となりました。

その後、大学への転換をめざし、より質の高い教育が必要と考え短期大学部を設置し、2003 年に健康福祉学部を開設しました。しかし福祉を志望する学生は減り続け、さらに、体育学部の入学難易度が比較的高かったこともあり、一部の学生は進路の選択肢として健康福祉学部を選んでいましたが、必ずしも福祉の分野を志していたわけではなく、その結果、学部としての専門性や方向性が次第に曖昧になっていき、最終的に改組に踏み切ることとなったわけです。

教育の現場では、体育を指導できる小学校教員のニーズが特に高いため、それに応える方針のもとで教育学部を開

設しました。毎年一定の割合で学生が小学校教員として採用されており成果を上げています。中高の保健体育教員養成については、スポーツ科学部でも担っており、スポーツ科学部と教育学部がお互いに良い刺激を受けながら、前向きに成長し合ってくれればと願っております。今のところ、予想以上の成果を上げていると感じます。

神崎：教育学部の小学校教員養成は、教育現場からの期待が大きく、本学の卒業生は高く評価されています。体育教師の活躍の場は、教科指導はもちろんのこと、学校全体の児童をまとめ、さまざまな場面で学校運営をつかさどる役割も担っています。特に学校行事において活躍できる人材が強く求められています。

野田：何年か前に小学校の運動会を見学した時に、驚かされたことがあります。



「智・徳・体」の実践から、本学の魅力とブランドをさらに高めていく

した。準備から当日の運営まで、小学校の教師はほとんど関わっていませんでした。外部委託により、専門のスタッフが学校に来ていました。もちろん教師は自分のクラスの管理はしていますが、運動会の運営自体は外部の業者に任せていたのです。体育大学で養成された小学校教員は、運動会などの学校行事をスムーズに進められる力が備わっています。そのような行事をやりたいと思っている教師もたくさんいると思います。今後、運動に関する指導は、外部人材に委ねられていく傾向にありますが、本学のように小学校教員を養成して、自らの手で児童の体力づくりを担う人材が全国の学校で活躍してくれることを強く願っています。

—— 教育現場ではデジタル化が急速に進んでいますが、本学ではどのような取り組みを行っておられますか。

神崎：本年度からフィジカル e スポーツ、ゲームパフォーマンス分析など、スポーツ DX（デジタル・トランスフォーメーション）を全国の大学に先駆けて学ぶことができるデジタルスポーツ論を開講しました。教員のほか、スポーツ DX に取り組む企業も授業を担当し、最先端の技術や知識を直接学ぶことができます。それに伴って教室も改装し、ラーニングコモンズ×デジタルスポーツ・スクエアが設置されました。DX の世界はものすごく幅が広く、さまざまな分析をすることは当然のことですが、パーソナルな世界のなかで体育の授業をするところにまできています。健康に関することや、人間の動作を解析していくなかで認知症やアルツハイマー病の予兆を察知できるようになり、このような分析ができる学生、あるいは将来的にそれを開発していく学生が育っていったらと思います。これらを、スポーツ科学部だけでなく、教育学部にも展

開していければと考えています。

また、e スポーツがオリンピック種目に加わることになりました。この e スポーツはテレビゲームの延長という意見もありますが、健康面に配慮されたものや、よりスポーツに近い性質を持つ競技もあります。今すぐということではありませんが、将来的に本学でも取り組んでいく日が訪れるかもしれません。さらに、体操競技で、選手の動作を AI（人工知能）で解析して判定するというシステムを本学で導入する予定です。企業との連携協力を通して体操だけではなくて、いろんな種目や研究分野で取り組める体制を作れたらいいと思います。

—— 本学と地域との関りについて、現在の取り組みや、その背景について教えてください。

神崎：現在、メディアで注目されているのは、中学などで運動部活動を指導する学生を育成する「グッドコーチ養成セミナー」です。地域で子どもたちがスポーツをするうえで、必要とされる指導者を養成するプログラムに取り組んでいます。学生をしっかりと教育して、現場に派遣しています。社会の仕組みが変わっていくなかで、困っている地域に本学のプログラムで補っていかうとしています。地域貢献ボランティア活動は、本学の教職員、学生が取り組んできたことで、歴史ある活動となっています。最近では、東北地方の大震災で学生、教職員を派遣し、能登半島の地震でもボランティア活動に参画しています。目立つ活動ではないかもしれませんが、これらを通して学生たちが学びながら、少しずつ成長していけたらと考えています。学内の学びだけではなく、外に出て学びを展開することも教育の重要なポイントであり、まさに本学の建学の精神である「智・徳・体」の教育を実践する取り組みとして大切にしています。

野田：理事会、評議員会でも、その話題がでました。東北の大震災以来、学生たちが途切れることなく継続している復興支援活動「サンライズキャンプ」を、能登半島の震災でも取り組みました。非常に素晴らしい活動で、大学としての魅力や強みを、より積極的にアピールしてほしいとご意見をいただきました。本学では、指導者養成という教育の一環として当たり前に取り組んでいることですが、外部の方から見たら、褒めていただける内容です。当たり前に行っていることのなかに、実はすごいことがあるかもしれません。大学の危機が叫ばれるなか、そうした取り組みをアピールし、さらに強化していくことが求められています。

神崎：最近では、熊取町の三大学と連携協定を結び、少しずつ展開を進めています。本学の十分とはいえない教育・研究環境は関西医療大学に補っていただき、関西医療大学の学生が本学でトレーナーの実習を行うなど、さらなる連携強化をめざしています。また、大阪府では初めての試みとなる泉佐野警察署との連携協定も締結し、防犯に関する日常的な取り組みを推進しています。地道な活動ではありますが、地域貢献を粛々と続けるなかで、学生たちには大学の外の多様な世界を知り、成長してほしいと考えています。

—— 今後の 10 年を見据えたうえで、どのようなビジョンや方向性を描いておられるのか、お考えをお聞かせください。

野田：今後、大学は国公立、私立と関係なしにダイナミックな再編が行われるでしょう。しかし、どんな状況になっても柔軟に対応できるようにしていきたいと考えています。本学は同窓会や卒業生との強い絆が大きな力となっており、学生確保の重要な支柱として貢献していま



野田 賢治（のだ けんじ）

1978 年学校法人浪商学園に奉職。1986 年に常務理事、2003 年に理事長就任。2004 年 10 月より大阪私学経営者協議会（元会長）顧問に就任。2008 年 4 月より大阪私立中学校高等学校連合会 顧問に就任（元会長）。2012 年 4 月より文部科学省大学設置・学校法人審議会 学校法人分科会特別委員を務め、2014 年 4 月から 2020 年まで委員を務める。2019 年藍綬褒章を受賞。2020 年 8 月より大阪私立学校振興協会会長。

神崎 浩（かんざき ひろし）

1983 年筑波大学体育専門学群を卒業、1985 年筑波大学体育研究科修士課程を修了。1985 年、大阪体育大学着任。2013 年体育学部スポーツ教育学科長、2018 年学長補佐、2021 年体育学部長に就任。2023 年から副学長を務め、2025 年学長に就任。専門分野は武道教育学、剣道指導法。現在、本学剣道部顧問、剣道範士八段。監督として、全日本学生剣道優勝大会（団体）優勝 2 回、全日本学生剣道選手権大会（個人）優勝 1 回、全日本女子学生剣道選手権大会（個人）優勝 1 回。このほか、2009 年世界剣道選手権大会で監督として女子団体と個人で優勝。

学生と築く“教職学協働”三者で未来を創る大学へ

す。卒業生にとって本学が「帰ってきた場所」であり続けるために、こうした関係をさらに深め、大学の存在価値を高めていくことが大切です。

神崎：社会の変化は想定より早く進んでおり、迅速に対応していく必要があります。大学は学生あつての存在であり、学びと成長の場をしっかりと確保していくことが重要です。国からは大学規模の適正化が求められていますが、本学は定員維持に努めていく考えです。厳しい入試状況を経験した時期もありましたが、教職員の協力により V 字回復を果たしました。学生の学びの質とブランド力を高め、本学で学びたいと思われる大学づくりを進めていきます。

—— 最後に、これからに向けた抱負や思いをお聞かせいただけますでしょうか。

神崎：学長としては、この時代に重責を担うプレッシャーと、逆に大学が変わっていくことへの楽しみと二つがあります。大学の経営はこれまで教員が前面に出てやってきましたが、職員の協力も非常に大事になっています。「教職協働」が見える形で推進していきたいと考えています。また、学生の意見についても、大学をいい方向に向けていくために汲み上げていきたいと思っています。私から学生の間に入っていく、学生のさまざまな思いや期待を聞き、できる限り大学の運営に反映させていこうと思います。学生数が約 3,000 人規模の大学だからこそやれるということが、たくさん見えてきています。それを一つ一つ具体化していきます。学生が成長する大学を標榜するためには、教員自身も成長をしなくてははいけません。教員・職員・学生のみなさんと一緒に声をかけながら進めていきたいと考えています。

野田：大学再編が進むなかで、職員の果たす役割は非常に重要です。目的意識を持ち、他大学との連携を大切にしながら先を見通せる体制を整え、そして教員と情報を共有し教育現場に反映させていくことが求められています。教員は教育の専門家として、教育の質を上げていくために専門を磨き、そして教授していくことが大事です。教員・職員が共に将来のあり方について議論を深めていただきたいと思います。学長も大きな責任を負っていますが、一人で背負うものではありません。教職員全員で大学の発展を支えていくことが何より重要です。法人も連携を図りながら、大学の未来を築いていきたいと考えています。

—— ありがとうございます。

私にとってのSFGs

～『なんとかなる』で心と身体を整える～

私をご存知の方は私に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか。

実は、私は色々なことに対して「ポジティブシンキング」する一面があります。

業務はもちろんですが、プライベートでも基本的にはポジティブです。

例えば、イレギュラーな業務が発生した時や頼りになる上司が突然退職した時は新しい経験・成長できる機会と捉える。また、友人との予定が突然キャンセルになった時は思いがけず自由な時間が手に入ってラッキー、と考えることで、ネガティブな感情を抑制することができ、結果的にストレスも軽減されています。

人は、辛いことや高い壁があると、ネガティブな感情が先行しがちですが、

自分の場合は「本当にすべて悲観することしかないのか?」「次に同じことが起きないようにするにはどうすれば良いか?」「この程度で済んで良かった。」など、基本的には『なんとかなる』と考えるように心掛けています。

そうすると、この広い世界で自分に関わるレベルくらいの出来事であれば、必ず好転する糸口は見えてきます。

もちろん、全ての出来事にあてはまるとは言い切れませんが。。。

私自身の感情の起伏が少ないのも「ポジティブシンキング」があるからだと考えています。

自分たちを取り巻く環境は日々厳しくなっていますが、仕事もプライベートも「ポジティブ」を意識しながら、みんなで乗り越えていきましょう！

最後までお読みいただきありがとうございました。（総務部／人事給与担当 中辻由幸）



SOSHIKI FUDO GOALS

浪商学園をより良くするための17の目標



SOSHIKI FUDO GOALS
行動指針を浸透させ
浪商学園をより良くする
ことをめざした17の目標

令和 6 年度 決算の概要

事業報告・予算・決算の詳細については、
こちらからご覧いただけます▶

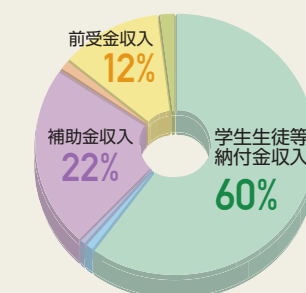


資金収支計算書

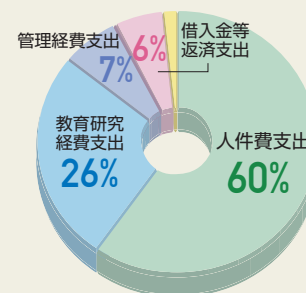
(単位: 百万円)			
収入の部	予 算	決 算	差 異
学生生徒等納付金収入	4,429	4,428	0
手数料収入	79	90	▲10
寄付金収入	64	69	▲4
補助金収入	1,538	1,650	▲112
資産売却収入	2	3	0
付随事業・収益事業収入	11	19	▲8
受取利息・配当金収入	0	2	▲1
雑収入	97	109	▲11
借入金等収入	0	0	0
前受金収入	863	882	▲19
その他の収入	130	135	▲4
資金収入調整勘定	▲956	▲963	6
前年度繰越支払資金	3,033	3,033	
収入の部合計	9,294	9,460	▲165

(単位: 百万円)			
支出の部	予 算	決 算	差 異
人件費支出	3,542	3,513	28
教育研究経費支出	1,567	1,525	41
管理経費支出	423	389	34
借入金等利息支出	10	10	0
借入金等返済支出	329	329	0
施設関係支出	3	3	0
設備関係支出	117	85	32
資産運用支出	0	0	0
その他の支出	398	426	▲27
予備費	166		166
資金支出調整勘定	▲227	▲187	▲40
翌年度繰越支払資金	2,962	3,362	▲399
支出の部合計	9,294	9,460	▲165

- 学生生徒等納付金収入
- 手数料収入
- 寄付金収入
- 補助金収入
- 付随事業・収益事業収入
- 雑収入
- 前受金収入
- その他の収入



- 人件費支出
- 教育研究経費支出
- 管理経費支出
- 借入金等利息支出
- 借入金等返済支出
- 施設関係支出
- 設備関係支出



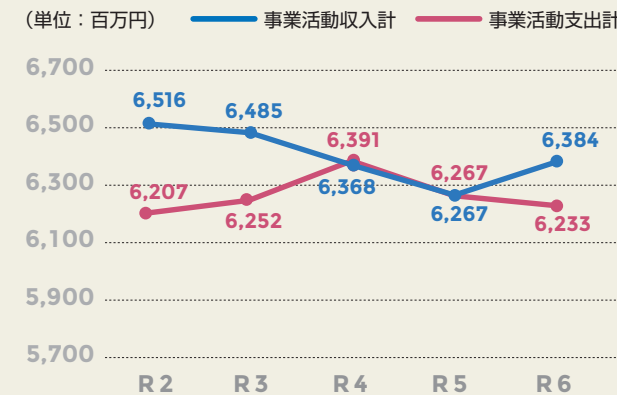
事業活動収支計算書

(単位: 百万円)					
教育活動収支	科 目		予 算	決 算	差 異
	収入の部	学生生徒等納付金	4,429	4,428	0
		手数料	79	90	▲10
		寄付金	66	71	▲5
		経常費等補助金	1,538	1,650	▲112
		付随事業収入	11	19	▲8
		雑収入	97	109	▲11
		教育活動収入計	6,223	6,370	▲146
	支出の部	人件費	3,552	3,522	30
		教育研究経費	2,279	2,229	50
		管理経費	504	469	35
		徴収不能額等	0	0	0
教育活動支出計		6,337	6,221	115	
教育活動収支差額		▲113	148	▲262	
教育活動外収支	科 目		予 算	決 算	差 異
	収入の部	受取利息・配当金	0	2	▲1
		その他の教育活動外収入	0	0	0
		教育活動外収入計	0	2	▲1
	支出の部	借入金等利息	10	10	0
		その他の教育活動外支出	0	0	0
		教育活動外支出計	10	10	0
		教育活動外収支差額	▲9	▲8	▲1
	経常収支差額		▲123	140	▲263

特別活動収支	科 目		予 算	決 算	差 異
	収入の部	資産売却差額	0	0	0
		その他の特別収入	7	12	▲4
		特別収入計	7	12	▲5
	支出の部	資産処分差額	3	1	1
		その他の特別支出	0	0	0
		特別支出計	3	1	1
	特別収支差額		3	10	▲7
	(予備費)		190		190
	基本金組入前当年度収支差額		▲310	151	▲461
基本金組入額合計		▲518	▲471	▲46	
当年度収支差額		▲828	▲320	▲508	
前年度繰越収支差額		▲16,044	▲16,044	0	
基本金取崩額		0	0	0	
翌年度繰越収支差額		▲16,873	▲16,365	▲508	

参考

事業活動収入計	6,231	6,384	▲153
事業活動支出計	6,351	6,233	117



※記載の数値は端数を切り捨てて表示しているため、合計が一致しない場合があります



今号の一枚

七夕飾り

大阪体育大学浪商幼稚園

色紙の輪や三角をつなぎ、可愛い七夕飾りを制作しました。毎年、青凌中高からいただく大きくて立派な笹に、一つひとつ丁寧に結びつけました。五色（ごしき）の短冊には、青や緑が「木」、赤が「火」、黄が「土」、白が「金」、紫や黒が「水」といった自然の意味が込められており、子どもたちはその意味を先生から教わり、願いを込めて飾りました。

子どもたちの元気な笑顔と願いが、夜空の星に届きますように――。

学園広報誌 ちぬ の由来

浪商学園に勤務する教職員の交流を図るために発行された学園広報誌「ちぬ」。

茨木時代は校舎前（現在の浪商幼稚園前）を流れる安威川より名を冠した「あいがわ」でしたが、熊取移転に伴い「ちぬ」と改められました。

「ちぬ（茅渚）」とは奈良時代から見える和泉地方の呼称。「古事記」神武天皇条にも見え、大阪湾を「ちぬの海」ともいい、浪商中学校・高等学校、大阪青凌中学校・高等学校の校歌でも歌われています。



学校法人浪商学園 学園報 ちぬ No.067 令和 7 年 7 月 29 日発行

発行者：学校法人浪商学園 経営企画部／発行責任者：野田達彦

〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1

TEL 072-479-3111 FAX 072-453-8972

学園ホームページ：https://www.namishogakuen.jp/

印刷・製本：株式会社毎日新聞大阪センター